氏　　名	高樽　由美
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 69 号
学 位 記 番 号	看博第 24 号
学位授与年月日	平成 28 年 9 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	成人期発症 1 型糖尿病患者の resilience を高める教育プログラムの開発 Development of an educational program to increase resilience among patients with adult-onset Type 1 diabetes
論文審査委員	主査　教授　藤田　佐和(高知県立大学) 副査　教授　池添　志乃(高知県立大学) 教授　内田　雅子(高知県立大学) 教授　長戸　和子(高知県立大学)

論文内容の要旨

【目的】「成人期発症 1 型糖尿病患者の resilience を高める教育プログラム」を開発することである。

【プログラムの開発過程】プログラムの開発は以下の 3 段階からなる。

〔第 1 段階〕文献検討、resilience の概念分析を行った。次に 1 型糖尿病患者の療養体験を明らかにすることを目的に、所属施設の看護倫理委員会の承認を受け、A 県の 1 型糖尿病患者会における 12 名の患者の語りを、質的帰納的研究方法を用いて分析し、プログラム開発のための基礎資料を得た。これらの結果を統合し、認知行動理論を基盤としてプログラム原案を作成した。プログラムの教育目標は、1 型糖尿病患者が、療養行動に伴う困難な出来事に適応するために必要な力を獲得し、周囲のサポートを得ながら療養行動を行うことにより、心身の状態を維持し社会生活を継続できることである。1 型糖尿病患者は、対処する力、捉え直す力、回復力を獲得することで resilience が高められると考えた。プログラムは、①病気の理解と取り組み、②ストレスのコントロール方法、③療養と社会生活の両立に向けて、④病気との向き合い方の 4 つのセッションで構成した。教育技法は、①説明的介入、②モデリング、③自己強化、④認知再構成法、⑤セルフモニタリング、⑥リラクセーション法、⑦問題解決法、⑧強みの同定の 8 技法を組み合わせて用いることとした。評価方法は、①参加者評価（質問紙・目標達成状況)、②プログラム実施者評価（理解度・目標達成状況)、③生理学的指標とした。

〔第 2 段階〕プログラム原案の適切性と実行可能性を検討することを目的に、看護専門職と、1 型糖尿病患者を対象に調査を実施した。プログラム原案、運営方法、プログラムの有効性について、慢性疾患看護専門看護師 6 名に質問紙調査を、糖尿病認定看護師 7 名にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。プログラム使用教材、運営方法について、1 型糖尿病患 8 名にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。これらの調査は、高知県立大学研究倫理審査委員会及び、必要時研究協力者施設の倫理審査委員会の承認を受け実施した。

〔第 3 段階〕 第 2 段階の結果をもとに、プログラム原案を修正した。修正したプログラムの内容について、糖尿病専門医とリエゾン精神看護専門看護師に助言を受け、最終的な成人期発

症 1 型糖尿病患者の resilience を高める教育プログラムを作成した。
【考察】わが国初の新たな成人期発症 1 型糖尿病患者の教育プログラムを、成人期発症 1 型糖尿病患者と 1 型糖尿病患者の看護や教育に精通した看護実践者と研究者が協同して開発することができた。本プログラムは、参加者の状況に応じたプログラム提供が可能であり、プログラム実施者と参加者の相互作用により、resilience が高められることが期待できる。慢性疾患看護専門看護師、糖尿病看護認定看護師、1 型糖尿病患者への調査結果から、プログラムの有用性と実行可能性が示唆された。

審査結果の要旨

慢性疾患の中でも 1 型糖尿病患者は 2 型糖尿病と同じく生涯血糖のコントロールを行いながら、病と共に生きていかなければならない。1 型糖尿病は病態も充分に解明されていないため、2 型糖尿病と比べると、血糖コントロールが難しく、患者も自己管理に苦慮していることが多い。さらに、1 型糖尿病を管理指導できる医師や医療スタッフも少なく、患者はサポートや情報が充分得られないまま、個々で日常の血糖管理を行わざるえない生活をしており、社会的問題を抱えている場合が多い。わが国では 1 型糖尿病患者に関する研究は少なく、特に成人期発症の患者の支援の実際や患者教育について十分把握されていないのが現状である。一方、米国を中心とした海外では、1 型糖尿病患者の教育プログラムが提供され、介入評価も行われているが、日本にはそのプログラムさえも取り入れられていない。これらを背景に高樽氏は、慢性疾患看護専門看護師としての臨床実践を通して本研究の課題･研究の問いを発展させていった。

「成人期発症 1 型糖尿病患者の resilience を高める教育プログラム」の独創的な点は、患者の resilience 着眼し、未だわが国では開発されていない 1 型糖尿病患者を対象とする教育プログラムを“resilience を高める”ことに焦点を当てて開発した点である。成人期発症 1 型糖尿病患者の resilience を高めるとは、患者が病気の管理に必要な知識と技術を獲得し、社会的に適応することができ、病と共に生きることができるようになることである。このプログラムは、認知行動理論を基盤として文献レビュー、概念分析、成人 1 型糖尿病患者の療養体験に関する記述研究を行い、当事者の体験を理解し、教育目的、教育内容、教育方法、運営方法、プログラムの評価指標・方法を含む包括的な教育プログラム原案を丁寧に作成し開発過程を辿っている。resilience の概念分析から【対処する力】【捉え直す力】【回復力】を高めることで、1 型糖尿病患者の resilience が高められるとした。成人 1 型糖尿病患者の療養体験として、【病気がわからないことに対する不安】【試行錯誤しながら療養に取り組む】【療養と折り合いをつける】【社会生活の中で療養することの困難さ】【将来の見通しの曖昧さ】のコアカテゴリーを抽出し、1 型糖尿病患者は、発症、診断時の【不確かな病に対する不安】から、時間の経過や療養体験を積み重ね、【試行錯誤しながら療養に取り組む】ようになり、【療養と折り合いをつける】という経過を辿ることを明らかにした。そのうえで、専門看護師、認定看護師と当事者による適切性と実行可能性の評価を得てプログラムを洗練化し、さらに、プログラム内容の適切性、有用性を高めるために他職種および他領域の専門家から助言を得て完成させている。本プログラムの最も特徴的な点は、成人期発症 1 型糖尿病患者と 1 型糖尿病患者の看護や教育に精通した看護実践者と研究者が協同して、わが国初の成人期 1 型糖尿病患者の教育プログラムを完成させたことである。本研究は慢性看護学の根幹的でかつ臨床の重要課題を取りあげてお

り、臨床実践にそして教育に活用可能な成果となっている。

以上のことから、本審査委員会は、本研究は研究テーマの着眼点、独創性、研究へ着実な取り組み、研究成果の有効性と実践への発展性、慢性看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であることを認めた。しかし、開発したプログラムは、丁寧な開発過程を踏んでいるが、プログラム介入による評価、検証には至っていない。今後、プログラムの検証を行い、臨床で活用できるようにより洗練化する必要がある。今後はこれらの課題解決に向けた研究の継続が必要である。